

洋服と伝統衣装・男と女——ケニアの衣生活

丹 埜 靖 子

衣服の二重構造伝統

現代ケニア人の衣生活に、伝統的なアフリカンスタイルと外来の洋服との二重構造が見られるのは、ちょうど、田舎に行けばみんなが和服を着ていた昔の日本と似ている。そこには社会慣習や流行、着心地の善し悪しもあるが、何にもまして、入手しやすさがキメ手となっている。

植民地時代にイギリスなどからやって来た政府の役人や植民者の目には、ケニアのアフリカ人はほとんど裸と映ったらしい。彼らの残した記録には "naked" という表現がよく出て来る。ナイロビ駐在のある日本人は、現在、首都ナイロビがそこに位置するハイランド一帯は、わずかな衣類しか身につけていなかったアフリカ人にとって、さぞかし寒く、住みにくいところではなかったかと疑問を述べておられた。たしかに赤道直下とはいえ、一五〇〇〜二四〇〇メートルの高度をもつハイランドは冬期、まして夜分にはかなり冷え込む。

ヨーロッパ人の到来以後、その衣文化が持ち込まれ、今では都市部や近郊ではほとんどの人が洋服を着ている。暖をとるためのセーターやジャンパー、ズボン、ジャケット、コート類も普及した。ではそれ以前は、この高地で、アフリカ人はどんな衣服を身につけていたのだろうか。

伝統衣装の多様性

ナイロビや地方市町村を除く大部分の国土はサバンナや山岳地帯、あるいは砂漠である。そこに遊牧、牧畜を中心に暮らす人々は、昔とそう変わっていないと思われる伝統的衣装を中心に生活している。各エスニック・グループごとに多少違いがあり、また身分や仕事柄によっても違いがあるが、外部の者の目に映る印象をごくならしめていけば、布（あるいは皮革・毛布）をまとう形である。その方法としては、吊す、結ぶ、巻きつける、ひもで体に縛るなどのスタイルが基本となっている。ヨーロッパから綿織物や毛織物が入ってくる以前は、専ら山羊、羊、牛などの皮が用いられた。綿布や毛布は今世紀初めの頃には「アメリカニ」と（後には「ジャパニ」とも）呼ばれて、ごく少量入っていたらしい。

今でも、マサイ、サンブル、ボラン、ソマリ、トルカナほか多くの遊牧民や辺境に住む人々は、ほとんどが伝統的スタイルのようだが、素材は大きく変化した。マサイ戦士の赤は、観光写真でもおなじみのスタンダードカラーだが年とともに色あせる。髪の毛を赤土でこつてり固めて幾筋もの三つ編みにするヘアスタイリングや頭のかぶりもの、時にはボディペインティングも、重要な衣装の一部となっている。男も女も頭、耳、首、腕、足首などにガラス、真鍮、アルミなどのビーズや、皮革、貝、羽根、骨、角、銅などの素材を用いた装身具を身につけている。一般に遊

牧民の方が農耕民よりも、日常的に装身具を愛用しているようだ。

ナイロビに接する農村地域に住む、たとえばキクユの人たちの伝統的な衣装は、やはり山羊や羊や牛の皮を用いた。だから皮なめしの技術は非常に重要な手仕事となっていた。ヨーロッパ人が入植した地域であったため、キクユはとくに直接に影響を受けた。現在は洋服が支配的であるが、部分的にはアフリカ的なものを残している。たとえば女性は農作業や工事などで高いところに登ったりする時はワンピースやスカートの上にカンガを巻き付け、人の目から防備を固める習慣がある。

東の海岸地方はアラブの影響が色濃いスワヒリ文化の世界であり、内陸部とはガラリと変わった別天地。ここでは、とくに年輩者には伝統衣装が愛好されている。女性のカンガやブイブイ（目だけを出す黒衣）、男性のカンズと呼ばれる綿の白い長衣と白いアラビア帽が代表的スタイルである。

ナイロビの女性たち

町に降り立

つ人は、陽光に映える女性の色とりどりの服装に目をうばわれることまちがいない。大都市では誰も

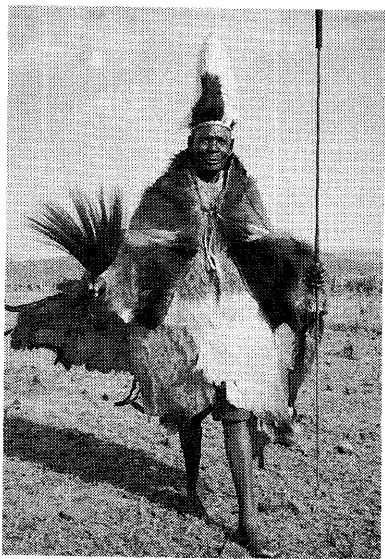


サンプル「戦士」(モラン)ティモ君の仕事着(北ケニア・エルモロにて)

が洋装である。一般にカジュアルで、男はごく普通のシャツやTシャツにズボン姿でノーネクタイ、荷物をもたないことが特徴的である。多少色あせてはいるが非常に清潔な印象を受ける。そろいの背広上下を着ている人はかなり安定した仕事をもった人であろうし、それが新しければかなりのエリートと見ることが出来る。無帽で口ひげを生やした人が多い。

男の服装が地味でワンパターンなのに比べて女の服装にはおしゃれを感じる。ドレスやブラウスは化繊のものが多く、木綿と比べて色があざやかで、光沢があり、軽いので人気がある。ズボンはジーンズの他はあまり見かけない。一般に女のズボンは、体の線を誇示していると受け取られるようだ。小中学校の女子教員はズボンを禁止されているという。黒板を使う時生徒が目のやり場に困るといふことらしい。足もとは合成皮革のサンダルやパンプス、カッターシューズなどを素足ではなく。チョコレート色の肌だからストッキングなど無用の長物である。雑誌や新聞のファッションのページは、ケニア社会に不釣り合いと思えるほど力が入っている。髪にはとくに気をつかう。長いのがおしゃれで、伸ばしたままだとアフロスタイル、細い幾すじもの三つ編みを変化をつけてまとめ髪飾りをつけたもの、ストレート型（パーマでのばす）、ポニーテール式のとめ髪も手のかかるおしゃれである。スカーフをターバン風に巻くのがとくに農村女性の定番である。文化・社会サービス省の次官オゴット女史のトレードマークのターバン姿には伝統を愛する彼女のメッセージが込められているようだ。

日頃カジュアルなケニア人もイースターや日曜日の朝教会に行く時、また晴れの日には変身す



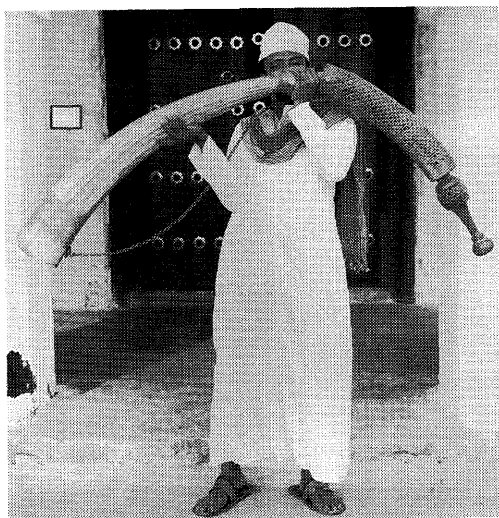
伝統衣装：ルオの長老の盛装。下からのぞくズボン（Consolata Fathers, Text Book Center, ナイロビ）

る。どこにしまつてあるのかと思ふようなまっ白なブラウスやレースのついた白いソックスをはき、ピカピカの靴をはき、最高にドレスアップする。キリスト教はケニア第一の宗教なのである。キリスト教と同様、宗主国イギリスの影響が色濃く残っている分野に司法制度があるが、仕事着の世界での代表は、裁判官の衣装である。ヨーロッパ人裁判官と並んでアフリカ人裁判官もブラチナブロンドのかつらとガウンを着用するのである。またアカデミックな世界では大学の卒業式の日に、学生、教授、そして学長である大統領も、全員が角帽とガウンを身につけるのもイギリス式であろう。

リズ式であろう。

アフリカ人の他にケニア社会の重要メンバーとしてインド系アジア人やアラブ人がいる。アジア人は彼ら独自の生活習慣をくずさず、私的にはコミュニティーの枠の中での行動が目だつ。したがって衣生活においても伝統尊重で、とくに女性はサリーを愛用する。

繊維製品の供給については、これまで綿製品はほぼ国内でまかなって



スワヒリ男性のカンズとアラビア帽
(Mohamed Amin & John Eamesed., Kenya, APA
Production)

きたが、現在は国内の綿花生産が必要に追いつかず、綿糸輸入が増加している。同時に繊維、履き物産業は輸入品との競争にさらされている。化学繊維製品はほとんどが輸入品に頼っている上、国内市場は大きくない。日本からもナイロンや合成繊維、糸が輸出されている。

ケニアも他の発展途上国と同様に、若年人口の割合が大きく、ケニア人三〜四人に一人は就学中という。小中学生はイギリス式にユニホーム着用が原則である。揃いのセーターやブレザー姿は美しく、教育立国を感じさせるが、毎年始めの進級進学時の親の負担は大変なものである。制服が買えない悩み、家庭で仕立てたいが同じ材料が買えないなどという訴えが新聞の投書欄を賑わすものこの頃である。制服と学校用の靴は、ケニアの製造業のかなりの部分を支えていると思われる。ナイロビの目抜き通りモイ・アベニューにはインド系のケニア人が経営するファッションブル

な衣料品店が並んでいる。客は主にヨーロッパ人か、子供の服を買いに来るインド系の人であり、姿もまばらである。

学校のユニホームは別として、アフリカ人が衣服を求める時は、もっぱら、アフリカン・マーケットやアフリカ人街の洋服屋、古着市、布屋（布地よりもカンガやキコイなどの定型布を売る）で仕入れる。古着はケニアでは充分に天寿を全うすることができる。外国人が帰国するときは古着類は使用人や知人のアフリカ人に残すのがならわしである。また外国のNGOなどから援助物資として大量に入ってきていた（しかし郵便局で受け取る際の手続きが煩雑で手数料が高いのと、また政府が古着の販売を取り締まっていることなどのため最近は入りにくくなったと聞く）。古着の攻勢に危機感をもった繊維産業労働組合の議長オゲンド氏は、古着販売が制限されなければ三〇ほどある繊維会社で近い将来解雇騒ぎが起こるのは必至であると警告していた。

付・カンガ――

ケニア女性の愛用衣

カンガはたたみ一畳ほどの綿布である。非常に用途が広く女性の衣生活に欠かせない。もとは頭にかぶる正方形のスクーフ布を六枚はいで大きくして使っていたもので、ホロホロ鳥によく似た黒白のハンテンもようが多かったことからカンガ（スワヒリ語でホロホロ鳥）と呼ばれた。これが十九世紀半ば頃からモンバサを中心に流行しはじめ、全国的に広まった。最初は六枚縫い合わせたものが、やがて簡便化され、最初から六枚の模様を織り込んだ一枚の布となり、現在では模様もカンガ全体で一つのパ

ターンや連続模様、色も材質も多様化した。面白いのはスワヒリ語でことわざ風の短文が書いてあることである。初めにある老練なカンガ商人のアイディアでスワヒリ格言をアラビア語で書いてみたら受けたことから急に広まり、第一次大戦後はローマ字で書くようになったといわれる。嫉妬に関する格言が特に人気があるとのことだが、例えば「嫉妬深い人と暮らすのは非常に勇気がいる」とか、「嘘つき者の道は短い」「私にかまわないで」「子供をつくるのは仕事じゃない、仕事はそれを育てることだ」「二頭の象が争えば痛いのは草だ」という具合である。どこのマーケットでもロープに色とりどりのカンガを滝のようにかけて売っている。「カンガ・その利用法一〇一」という本にはイブニングドレスからネンネコまで使い方のヒントが出ている。カンガを単独であるいは組み合わせて、結ぶ、巻く、ひもで縛る、はさむなどの方法で変化をつけるわけである。カンガ、キコイ、キテングなどの定型布は伝統衣装として洋服に対抗して根強い人気をもっている。

〔参考文献〕

- (1) Joy Adamson, *The People of Kenya*. London, Collins & Harvill Press, 1967.
- (2) Jeanette Hanby and David Bygott, *Kangas: 101 Uses*. Nairobi, Ines May Publicity, 1984.

(たんの やすこ/アジア経済研究所図書資料部資料・情報相談室長)